

献 辞

木畑和子先生は、2014年3月末をもって文芸学部ヨーロッパ文化学科を去られます。着任されたのが1999年4月ですから、15年にわたりヨーロッパ文化学科にあって研究と教育に力を注いで来られました。

木畑先生は、東京女子大学文理学部史学科を卒業された後、東京都立大学大学院人文科学研究科を経て、東京大学大学院人文科学研究科に進まれました。ドイツ学術交流会によるミュンヘン大学への2年間の留学をはさんで、同研究科を修了されます。1986年4月から東洋英和女学院短期大学国際教養科に奉職され、短期大学部の廃止、四年制大学への改組にともない、東洋英和女学院大学社会科学部に移られました。その後、本学にお迎えすることになったわけです。

ドイツ現代史は、日本の西洋史研究の中でも特にすぐれた研究成果を挙げている研究分野のひとつですが、それを担って来られたおひとりが木畑先生です。先生のご研究には三つの流れがあります。最初に手がけられたのは、ナチスの権力構造の問題で、ヘルマン・ゲーリング帝国工業所という国営企業が主たる素材でした。ほとんどが未刊行だったニュルンベルク国際軍事法廷の記録を駆使しての綿密な実証研究です。その後、ナチス研究はしだいにさまざまな面からの検討がなされる（必要とされる）ことになりますが、木畑先生は、これに「健康」政策、安楽死、断種といった当時の政策から迫ろうとします。これらの政策は、ナチス支配の特質を表しているものですが、同時に近代社会に潜む抑圧や規律化傾向にも通底するもので、こうした研究は、木畑先生の問題関心の鋭さをよく示しています。三つ目は、『キンダートランスポート』（成文堂、1992年）に始まる、ナチス体制下のドイツを逃

れてイギリスに渡ったユダヤ人の子どもたちと、かれらのその後を扱った研究です。本学に赴任されてからのご研究の多くは、これに充てられていて、海外研修の期間も含め、たびたびドイツ・イギリスに調査に赴かれました。現在、「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち」が『成城文藝』に連載されています。上述のヘルマン・ゲーリング帝国工業所関連研究、「健康」政策のご研究は、木畑先生の師匠であった西川正雄先生譲りとも言ってもよいであろう密度の濃い精緻なもので、後進の研究者が必ず参照しなければならないものですが、もし木畑先生の代表作を挙げるとしたら、このキンダートランSPORT研究ではないかと思います。研究者としての先生の根っこのところにある正義感や人に対する細やかな心遣いがうかがわれる作品群でもあります。

木畑先生はまた、すぐれた教師でありました。私はフランス史関係の授業を担当していますので、1年生、2年生の頃に授業で顔を合わせていた学生でも、ドイツ語を主言語とする学生たちとは3年生、4年生になるとカリキュラム上ほとんど顔を合わせなくなります。けれども、卒論審査で木畑ゼミの学生の副査を担当すると、あの学生がこれだけ伸びたのかと、驚くほどしっかりした論文を書くようになってるのが常でした。そこまで指導するのにどれほどの時間と労力を費やされたことでしょうか。もっとも、それは、木畑先生が「教えることが好き」—この言葉は何度か先生ご自身からお聞きしたことがあります—であったからこそなのでしょう。木畑先生とは、同じ歴史系の教員として、さまざまな面でコンビを組んで仕事をさせていただきました。その長い期間の間に、私たちの意見の合わないことはまずありませんでしたが、強いて挙げるなら、私がある時、通年科目の「ヨーロッパの歴史特殊講義」（「独」「仏」）を半期科目にすることを提案したさいに、木畑先

生が反対されたことくらいでしょう。それだけ、学生たちに歴史を教えることを大切に、楽しみになさっていたということです。

最後に個人的なことを少し。木畑先生と私は、大学院の在籍期が重なっていて、私が大学院に入学した年の秋に、木畑先生が留学を終えて帰国されたと記憶しています。専攻領域も離れていたし出席するゼミもあまり重ならなかったので親しく話をさせていただく機会はなく、先輩の院生方と談笑しておられる様子をお見かけしている程度でしたが、幸いなことにその後、木畑先生が東洋英和女学院の短期大学に勤務されている頃、私が同じキャンパスの中にある四年制大学の方に勤めるようになり、お会いする機会が増えました。短期大学部が四大への改組により廃止になるさいには、当時教務の責任者を務めておられた木畑先生が、重要な役割を果たされたことも伝わって来ました。その後、ご縁があって成城大学で同僚としていろいろな仕事をともにさせていただくことになりました。私は狷介な人間なので、社会人として足りないことが多く、木畑先生がおられたために何とかやって来られたような気がしています。お礼を申し上げるとともに、今後ますますお元気でキングダートランスポート研究を完成されることをお祈りして、筆を擱きたいと思えます。

林田伸一